

ウォライタ語文字化の問題点

若狭 基道

1. はじめに

以下では、ウォライタ語を文字化する際の問題点の一部を述べる。体系的な考察ではない。

ウォライタ語は、エチオピア南西部で話されている言語である。アフロアジア語族、オモ語派に属する。

ウォライタ語地域で一般に通用する文字としては、エチオピア文字(アムハラ語の影響)ラテン文字(英語教育の影響)の2つが挙げられる。

2. ウォライタ語の音韻

子音は以下の通りである。

p,b,t,d,k,g,m,n,l,r,w,y[j],f,s,z,sh(無声後部歯茎摩擦音),c(無声後部歯茎破擦音),j(有声後部歯茎破擦音),h,ʔ(声門閉鎖音),P,T,K,C(以上の4つは喉頭化音),D(喉頭化音の一種)

その他、従来は lʔ, mʔ, nʔ とされてきたものもそれぞれ l,m,n の喉頭化した音と考えた方が好いと思われる。つまり、D、更には P、T、K、C と同じ系列に属すると思われる。L,M,N と表記する。

又、語例が極少数しか見付からない、極めて稀な子音が存在する。

有声後部歯茎摩擦音 zh

鼻音化した h nh

母音は以下の通りである。

a,i,u,e,o

母音の長短は音韻的に有意義である。

アクセントに就いては不明な点が多いが、少なくとも単純語レベルでは高低の二つ段階を設定すれば記述する事が出来る。筆者は「高」にアクセント記号を付けて表す。

この他、当然の事ながらイントネーションやプロミネンスといった現象が存在する。どう表記すれば好いかは余り考えていない。

3. ラテン文字による転写

3.1. 筆者の転写法

上で述べたように転写している。又、形態素の境界はハイフンで示している（何を以って形態素と認定するかは時として難しい。ウォライタ語には所謂かばん形態素が多い）。

この転写法は、言語学者が論文執筆等の目的で使用するには最も相応しいものと思われる（と、願っている）。実例は後ほど挙げる。然し、実際に地域の人々が使うとなると、幾つか問題点もある。

1) 手で書いた時、K と k の区別がつきにくい。P と p、C と c も同様。

-> 従って、フィールドワーク中、ノートに書く時は別の転写法を採用している。但しこれだと、パソコン入力には不向き。

2) 文頭の文字や固有名詞の始まりが必ずしも大文字にはならない。英語に慣れている者にとっては、これは不自然であろう。

3) アクセントを表示する必要はないと思われる。煩わしいし、多くの場合文脈等から自明である（ウォライタ語に通じている人にとっては）。実際アクセント、声調を表示している文字体系は殆ど無い（らしい。規範い文は例外。ハウサ語も高音調以外表示する習慣が少なくとも研究者界にはあるが、どこまで普及しているか？）

4) 形態素分離記号としてのハイフンも必要ないと思われる。

3.2. 所謂正書法

近年ラテン文字によるウォライタ語表記を普及させようという運動がある。決定版といえる正書法はないらしい。実際に出版されたり（といっても初等教科書と聖書の一部くらいしか私は知らないが）公の場で書かれたりしたもの（店の看板等。行政文書も最近はあるかも知れない）を見ても不統一な点がある。

問題点としては、以下の物が考えられる。

1) 二重母音の表記。

例えば au と書くべきか、aw と書くべきか迷う。アダムスの議論参照(Adams 1983: 49-51)。そこでは、異なる 2 種類の子音が連続する時には 2 番目の子音が重化されるのが常であるのに対し、例として挙げた au/aw の場合は重化が見られないという言語学的考察を根拠に au とすべきである事が述べられている。

但し、子音群の第二要素の重化に関してはこの解釈は正しくないと思われる。私の観察では音韻論的には勿論、音声学的にも重化と見なされる現象はこの環境では現れない。

形態論から見ても少し問題がある。aw-ee「何ですか？(何-疑問述語語尾)」aw-aa「何を？(何-絶対/対格語尾)」に見られる語根は、au-dee「いつ？(何-時)」にも見られると思われるが、そうした関係が見えてこない。即ち、同じ形態素が同じように表記されていない。

そして何よりも、エチオピア文字に慣れているものにとっては aw の方が自然である。

2) 子音の重化

上述したような事実誤認がある。dirbbiis のように、無意味な子音連続が頻繁に見られる。

又、1つの音素を2文字で表す場合があるが、その場合は、例えば sh の重化を shsh と書く。これだけでも4つも文字があって煩わしい気がするが、これらの子音が上述した2つの異なる子音連続の第2子音となる時もあり、その場合には、5子音文字連続すら見られる。例、birshshettaa。

3) 体系的でない。

これはオロモ語の表記にも見られる点である。オロモ文字の記述である柘植洋一(2001: 221)から引用する。

「なお、このシステムでは p : p h の場合と、c : c h の場合では、各々 [p]:[p'] に対して [t ']:[t] という音価をもち、放出音と非放出音の表記に際しての h の使用がまったく逆になっている。」

序に、同じ項目から。

「とくに、エチオピア内でのアムハラ語化が推進されると、アムハラ語以外の言語を文字表記することは厳しく制限されたのである。この状況が変わったのは1974年に帝政が倒れて軍事政権になってからで、1978年にはオロモ語の新聞が発行されるようになり、ここでもエチオピア文字表記法が採用された。ただし、オロモ語の使用が積極的に奨励・推進されたわけではなかった。こうした状況下で、反政府の立場に立つエチオピア国内・国外のオロモ人グループの中では、エチオピア文字に対して様々なローマ字表記法が試みられるようになっていった。」

余談。アダムス(本人、及び彼の研究)は「正書法」に極めて大きな影響を与えたと思われるが、彼自身論文では「正書法」を採用していない。

4. エチオピア文字による表記

エチオピア文字の実際の字形に就いては、別表を参照されたい。本稿では、所謂音節文字であるエチオピア文字を以下のように子音要素と母音要素に分けて転写する。スペース無しで綴られる場合はハイフンを、スペースがある場合にはスペースを入れる。

子音要素

伝統的な配列順に

h1, l, h2, m, s1, r, s2, sY, K, b, t, c, h3, n, nY, 7, k, h4, w, ‘, z, zY, y, d, j, g, T, C, P, S1, S2, f, p
その他 W をこれら子音要素の後に置く事で、唇化した音を表す文字を示す。

母音

同じく伝統的な配列順に

a, u, i, A, E, e, o

例えば、エチオピア文字の表の一番上の段の、一番左の列の文字は h1a、その下は la、その右は lu と表記する。

注意しなければならないのは、これらはいくまで文字を転写するために使われるものであり、実際には全く同じ音価を持つ文字でも使われた文字が異なれば転写の仕方も異なる事になる点である。

参考までに、これら文字の子音要素の転写に使われる記号に対応する子音音素は、順に、h, l, h, m, s, r, s, sY, K, b, t, c, h, n, nY, 7, k, h, w, 7, z, zY, y, d, j, g, T, C, P, S, S, f, p となる(文字遣いは基本的に第2章のウォライタ語の音素表記で用いたのと同じ。但し、S が s の喉頭化音、Y が先行する子音の硬口蓋化を示す点が異なる。)

母音の音価は環境によりかなり異なる場合もあるが、大体 a は狭い[a]、A は広い[a]、E が[e]、e が中舌の曖昧母音と考えられたい。但し、h1、h2、h3、7、及び‘の後では a は A と同じ音を表す。

このエチオピア文字は、ラテン文字よりは馴染みがあるらしい。例えば筆者が日本語を教えると大抵の人はこの文字で書く(実は日本人も多くの場合外国語を、特に余り知られていない言語の場合、片仮名で書く。こうした現象は言語学者の盲点かも知れない)。

一応、規範的な正書法があるらしく、それは例えば、「Wolaitatto Pitaliyaa Xaafiyo Wogaa」といった小冊子にも見られる。

この、エチオピア文字を使ったウォライタ語表記に見られる問題点としては、以下の物が考えられる。

1) 母音の合流

7 母音体系のエチオピア文字では、長短併せて 10 母音のウォライタ語の母音を完全に表し分ける事が出来ない。従って、次のような対応を示す。

エチオピア文字	ウォライタ音価
a	a

u	u, uu
i	ii
A	aa
E	e, ee
e	i
o	o, oo

2) 重子音

重子音は(そのままでは)表記出来ない。máát-aa「権利」も máátt-aa「乳」も共に表記上は mA-tA となる。これはアムハラ語を表記する時にも当てはまる。

3) アムハラ語では使用されない文字の創設

ウォライタ語の D はアムハラ語には存在しないため、da、du、di、dA、dE、de、do の各文字の上に点を付けた文字を創設して表す。勿論この文字はアムハラ語を表記する時には現れない。

尚、これは問題点とは言えないだろうが、逆に h2、h3、h4、s2、S2、及び⁶の各段の文字は使わない事になっているらしい。

余談。新しい文字 LAGEAL

正確にはエチオピア文字とラテン文字の合成。ウォライタに限らず、エチオピア諸言語のため作られた。一見体系的なようで、実はそうでもない。例えば喉頭化音はある場合には文字の上の横線で、ある場合には文字の下の横線で表されている。又、アムハラ語の音韻体系に捉われ過ぎている。実際に広く使われているという話は聞いた事が無い。

5. 実例

以下では規範に捉われず、ウォライタ語の話者が自由に書き綴ったものの実例を紹介する。現地調査の時にも資料を採集したが、なるべく自然に、自由に書き綴ったものを、という観点から、以下では筆者の許に実際に届いた手紙を題材とする。内容は差障りの無い事とはいえ、私事に属するものなのでグロスや訳は敢えて付けない。筆者なりの音韻分析と彼等なりの表記の違いに注意して戴ければそれで充分である。但し、手紙の性格上、音声言語としてこれらを聞いたわけではないので、音韻表記にも自信の無い所がある。「？」を付けておいた。

ラテン文字

Mr. Asela からの手紙

Daro siko laggia Motomiche aaimala gami7addi? Ne herrayi, Dabbo Assai Aarro de7i? Ne Erra oossoi (Tinnattee) loo7o? yanna gada aaissi Agadi? Erro Sarro De7a. Saluwa Tossia Sikuwane Sarroteta Neyone Nebitawane ubba Alamiyawu (saa7a ubbawu) immo.

参考 別の手紙では、Assai は Assayi、oossoi (oi は主格) は ossuwa (uwa は絶対格) となっている。

若狭の転写 (仮)

dár-o síiK-o lágg-iyá motomic-ee (?) áí mal-a gaMM-ádii? ne-héér-ai, dább-o as-ai aar-o (?) de7-ii? ne-ér-a (?) oos-oi (Tináát-ee) ló77-oo? y-aaná g-áádá áí-ssí agg-ádii? eeró sár-o de7-á. sal-úwa Tooss-ái síiK-uwa-nne sar-ó-tett-aa né-yyo-nne ne-biitt-á-u-nne ubb-á alám-iyá-u (sa7-á ubb-á-u) imm-ó.

重化していない子音なのに2つ書かれている場合がある。ウォライタ語の所謂規範的な正書法に従うと子音文字連続が上述の通り増えるのであるが、それが原因での一種の「過剰修正」か? 文中での大文字の使用にも注意されたい。

余談 Alemayehu (et al)の辞書

表紙には WOLAYTTATTO とあるが、本文(p.343)では wलयittattuwa と綴られている。(語幹は共に wolaittátt-まで。若狭の転写はそれぞれ wolaitt-á-tt-o, wolaitt-á-tt-uwa)

エチオピア文字

Mr. Asela からの手紙

tA s2e-Ko 7e-sYA mo-te-mi-cE 7a-ye-mA-lA s1A-ro da-7a-ye! tA-ne na lA-mo-tA-pe 7a-te-ne dA-ro lo-7o da-7a-ye-s1e. na-be-te-fA-yA-tE-tA-rA gAkA-de.

若狭の転写 (仮)

ta-síiK-o ish-áa motomic-ee (?) áí mal-a sár-o de7-ái? táání ne-laamót-aa-ppe (?) átt-i-n dár-o ló77-o de7-áis. ne-biitt-í fáyy-a-tett-aa-ra (?) gákk-adii?

Mr. Alemu からの手紙

s2a-ro lo-7o dE-7a-ye? tA-ni tA-mA-ca-rA-na tA-nA-tu-rA-na s2a-lu-wA-na s2a-7a-na ma-Di-dA To-s2A wa-le-KA-ni dA-ro-pE lo-7o dE-7a-ye-se.

若狭の転写 (仮)

sár-o ló77-o de7-ái? táání ta-mácc-ee-ra-nne ta-naatúú-rá-nné sal-úwa-nne sa7-áa-nne meDD-ída
Tooss-aa (?) wolK-aa-ni (或いは wolK-a-n) dár-o-ppe ló77-o de7-áis.

少し見ただけでも母音の使用に関して所謂標準的な正書法に則っていないことが多いのが分かる。特にウォライタ語の短い a をアムハラ語の A の母音を含む文字を使って表記している例が目につく。その方が、何らかの点で自然なのか？ウォライタ人の話すアムハラ語の特徴（訛り）も調べる必要があるかも知れない。

まだまだ面白い現象が見付かるかも知れないが、いずれにせよ体系的な考察は今後の課題としたい。

6. 文字論の基本的な立場

文字を扱った論考には優れたもの、鋭い指摘をしているものが幾つかある。ウォライタ語を直接論じているわけではないにしても、それを考える際に極めて深い示唆を与えるものから、幾つか引用してみたい。

河野六郎

「思うに、表語文字であれ、文字の根本的な言語的機能は究極には表語ということにあるらしい」(河野 1994:12)

「このように考えて来ると、文字の表音は表語の一つの手段に過ぎないということが判って来る。すでに述べたように、聴覚的な音声連続を感覚の異なる視覚形象の文字にうつす(移・写)ことは厳密には不可能である。そこで表音といっても語の音形をくまなく写しだすことよりも、暗示できればこと足るのである。エジプトやセムのアルファベットが子音しか示さないというのもそれで表すべき語の音形が髣髴^{ほうふつ}できればよいからである」(河野 1994:22)

中川裕

「これからアイヌ語を学ぶ人でなく、現在アイヌ語をしゃべれる人たちが使える文字、つまりカナで書き表すことの重要性」「表記法などきちんと決めなくたって、アイヌ語さえわかっていたらどんな書き方であっても理解できるのだ」(中川 1995:204)

以上、文字は結局のところ読めさえすれば好いのは事実である。但し、辞書の編纂まで考えると、或る程度の(というより、相当程度の)規範が必要かも知れない。実際ウォライタの辞書、語彙集は引きにくい。

では、どういう規範を作るべきか？それは文字化する目的によって異なるのかも知れな

い。

但し、以下の記述にも注意。

「ボーコーによる正書法については、ナイジェリアでは、カノ方言(Kananci)をもとにしたものが用いられることが多いが、これは単なる目安で、実際には、かなり好き勝手に綴られる。ニジェール共和国では、ユネスコが主唱して、音韻構造をまことに正確に反映した正書法を普及させようとしたが、完全に失敗した。

アジャーミーによる書記法も千差万別であり、欽定版といえるものはない」(松下 1992: 82) 尚、ボーコーとはラテン文字による、アジャーミーとはアラビア文字による正書法の事である。

7. その他

文字化に際しては言語学者が大きな役割を果たす事が多い。それは何故だろうか。言語学者が参加する事が悪いというのではない。然し、言語学的に、といっても実のところ音韻論的にのみ考察した結果のみを反映させた文字は、果たして使い勝手が好いのであろうか。第5章で挙げた実例や第6章で挙げた文字論を見ると、そのような事を考えさせられる。

これに関して借用語の問題を取り上げてみたい。例えばウォライタ語を文字で表すとして、特にラテン文字表記の場合西洋諸語を、エチオピア文字表記の場合アムハラ語をどう表記するか？それぞれ原語の綴り・書記方をそのまま反映させても好いのではないか？その方がひょっとしたら読みやすいのではないか？

参考として、ローマ字日本語を挙げる。

Hayata, T. 1987 Akusento-bunpu ni miru . . .

Sibata, T. 1962 Sirabīmu hōgen to mōra hōgen. (Shibatani 1990)

といった表記は、少なくとも私は何かしら抵抗を感じる。e-mail よりも ii meeru の方が日本語の音をきちんと反映している筈なのに、何故かしっくり来ない、と感じる人もいると思われる(皆がそうだと断言は出来ないが)。

似たような例として、他に数の表現がある。数の表現には算用数字を使ってもいいのではないか？

参考文献

Adams, Bruce A. 1983 *A tagmemic analysis of the Wolaitta language*. Unpublished doctoral dissertation, University of London.

Alemayehu Dogamo et al. 1991(Ethiopian calender) *Wolayttatto qaalatu Amaaratto birshshettaa*.

Addis Ababa University: Addis Ababa.

河野六郎 1977 「文字の本質」『岩波講座日本語 8 (文字)』岩波書店(reprinted in 河野六郎 1994 『文字論』:1-24.三省堂.

松下周二 1992 「ハウサ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大辞典第3巻 世界言語編(下-1)』:82-85.三省堂.

中川裕 1995 『アイヌ語をフィールドワークする』大修館書店.

Shibatani, Masayoshi 1990 *The languages of Japan*. Cambridge University Press.

柘植洋一 2001 「オロモ文字」河野六郎・千野栄一・西田龍雄(編)『言語学大辞典別巻 世界文字辞典』:220-221.三省堂.